

遺体が一人また一人

被災地で消防隊員が見た想像を絶する惨状



東日本大震災の発生後、被災地で救助者の捜索にあたった篠原浩典さん（右）と松橋慶武さん＝群馬県高崎市八千代町で2021年3月4日、鈴木敦子撮影（毎日新聞）

未曾有の大災害に見舞われた被災地で人々の救助にあたったのは、全国から駆けつけた「緊急消防援助隊」だった。群馬県内の消防隊員も震災当日の3月11日から続々と出動した。現地では度重なる余震や大津波警報、福島第1原発事故などに直面し、危険と隣り合わせの任務となった。

「一人でも多くの生存者を見つけ出したい。その一心で向かいました」。高崎市等広域消防局の消防司令補、松橋慶武さん（42）は3月11日深夜、「高崎1次隊」メンバーとして21人で東北に向かった。県外の大規模災害の応援は初めてで、使命感に燃えていた。

だが、派遣先の福島県相馬市で想像をはるかに超える惨状と向き合うことになる。街は津波で押しつぶされて見る影もない。高齢の住民が消防隊の車に向かって手を合わせて拝む様子から、経験のない修羅場に身を置いていることを実感した。

「誰かいますか？」。懸命に声を上げたが反応はなく、ただ静寂が広がっていた。倒れた家屋の下や側溝などをのぞき込むと、遺体が一人、また一人と見つかった。柱にしがみついたまま息絶えた人もいた。津波から逃れ、必死で生き延びようとしたのだろう。「もう津波は引きました。手を離して大丈夫ですよ」。

心の中で念じながら、そっと遺体を引き上げた。

3月11日は、管内の高崎市で地震による火災が2件、安中市でエレベーター内の閉じ込めが1件発生した。同消防局では地元での活動と並行して被災地への派遣準備が慌ただしく進められた。

同消防局の消防司令長、篠原浩典さん（53）は14日に出発。福島市の東北自動車道・吾妻パーキングエリアで停止中、「原発がはねた」との一報が入り、ひとまず屋内待機命令を受けた。4時間の足止めの後、相馬市に入ったが、当時は情報が交錯して現地の放射線量などの詳細は全く分からなかった。それでも篠原さんは、被ばくへの恐怖を振り払い、「腹をくくった」。

現地に到着すると、生存者はやはりいなかった。遺体の多くは既に収容されていたが、がれきの中を再度確認すると、まだ見つかることがあった。「もう見つからないでくれ。そんな気持ちでした。もちろん通常の災害現場では懸命に救助者を探し出すし、あの時だって同じでした。でも、あまりにも規模が大きくて『これ以上は……』と祈るような感覚がありました」

アルバムや写真、名前のついている物などは、箱に入れてその場に置いておいた。後日、親族とみられる人が必死で箱の中身を見る姿を見て、どこかホッとしたという。

県内から被災地に派遣された消防隊員は3月11日から5月29日までに延べ3140人に上った。同消防局では震災以来、ほぼ毎年3月11日に訓練を行っている。隊員たちの士気を高め、技術や意識を継承するためだ。

一方、県民に対して松橋さんは「自分の身は自分で守るという意識を持ってもらいたい」と語り、篠原さんは「地域の自主防災訓練や、いざという時の対応をイメージしておくこと、家族での話し合いなど、日ごろからできる準備をしておいてほしい」と訴える。

「自助・共助」の精神は、救助する側が住民を突き放すことを意味しない。助けられなかった多くの命に接し、「我々が到着するまで、なんとか命をつなぎ留めてほしい。そうすれば、必ず助けるから」との思いがある。

◇ ◇

東日本大震災は11日、発生から10年を迎える。山本一太知事は10日の記者会見で、「犠牲となられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災された方にお見舞い申し上げます。県内でも600人を超える避難者の方が生活している。震災の記憶を風化させないよう今後の復興を見守り、県としてできる限りの応援を続けていく」と話した。【鈴木敦子】

後輩に伝える震災の経験と教訓 広島消防士、 災害救助に生かす



津波被害が甚大だった宮城県名取市閑上地区での活動。中井英視さん（左から2人目）は緊急消防援助隊の副隊長だった＝2011年3月14日、広島市消防局提供（毎日新聞）

東日本大震災の発生直後、広島からも大勢が緊急救援活動で被災地に向かった。広島市消防局総務課長補佐の中井英視さん（46）は10年前、緊急消防援助隊第1次派遣隊の副隊長。自らの経験と教訓を後輩に伝えている。【山本尚美】

【写真特集】ドキュメント 10年を迎えた被災地

2011年3月11日は非番で自宅にいた。落ち着かない気持ちで床に就いた午前0時過ぎ、職場から電話が入った。「消防庁から派遣要請があった。明朝6時には出てくるように」

12日、わずかな装備を積み広島を出発した。指示は「東に向かえ」だけ。13日朝に「宮城県名取市で救助に当たるように」と行き先を告げられた。東北自動車道は夜通しの復旧作業で緊急車両には通行許可が出たが、徐行が原則。はがゆい気持ちを抑え、唯一の情報源であるラジオに耳を澄ませた。夜、光の消えた名取市に到着し情報収集を始めた。地元の人「閑上（ゆりあげ）地区が町ごと流された」と話した。

14日、隊の宿营地から閑上地区へ。がれきが果てしなく広がり、言葉もなかった。広島に原爆が投下された後の写真が浮かんた。

ようやく救助活動を始めたが、いつまた警報が出るとも限らない。油圧カタール程度の装備でがれきをかきわけ、人影を探した。断水で歯磨きも風呂に入ることもできず、食料や寝袋も足りず寒さに震えた。不思議と恐怖は感じなかった。「使命感なのかもしれないが、いわゆるスイッチが入ったままだったのだろう」と振り返る。

「生きていてほしい」との願いもむなしく、見つかるのは全て遺体だった。ある時、名取市の消防から救助要請があった。駆けつけた現場にあったのは津波で被災した車両。行方不明者を捜していた家族が、車を見つけて通報したのだった。

車中に閉じ込められていた遺体を收容すると、涙を流す家族は東北なまりの言葉で「父です」と感謝を述べた。「亡くなっても少しでも早く、ご家族の元に戻してあげたい」との思いがこみ上げ、士気を高めた。

1次隊は17日午後5時50分、活動を終えて帰路についた。中井さんは「いつか名取市を訪れたい」と思いながら、その機会はなかった。「私が特別に言えることは何もなし。ただ被災者の方が心穏やかに過ごせればと願うばかりです」と言葉を選ぶように話した。

広島市消防局は震災後に大きく変わったと言う。大規模災害や長期の救助活動を想定した訓練を繰り返し、装備も充実させた。その後に広島で起きた土砂災害や豪雨災害では、震災当時の経験がある隊員らが後輩を指導し活動にあたった。

「経験は生かされている。これからも私たちが後輩に心構えや現場経験を伝えることが使命だと思います」。当時の資料を見つめながら、かみしめるように語った。

東奥新報 21.3.11

出動中、車ごと流され… 大学校同期は南三陸で殉職／元消防署長・細越 さん(八戸) 【#あれから私は】

「真っ黒な水が押し寄せてきて、見る見るうちに水位が上がった」。八戸市津波防災センター館長の細越敬一郎さん（64）は八戸東消防署長消防司令長だった10年前、火災現場へ出動中、乗っていた車が東日本大震災の津波に押し

流されたが、車から脱出し難を逃れた。一方で、宮城県南三陸町では仲間の消防職員が津波にのまれて殉職、衝撃を受けた。1968（昭和43）年、白銀小学校6年の時には、十勝沖地震の津波が海岸に押し寄せるのを目撃。津波の脅威を身をもって知る者として「大きな地震が来たら、より高い所へ逃げて」と心から訴える。

10年前の3月11日午後5時45分すぎ、同市沿岸部の会社で火災発生の通報があった。東消防署から消防隊員約15人がポンプ車とタンク車、補給車、指令車計4台で出動。細越さんは指令車に乗り、湊高台から白銀陸橋を下って沿岸部の築港街方面へ向かった。すると津波が引いた後の路上に、がれきが散乱しているのが見えた。隊員らは一瞬、次の津波を恐れて現場に行くのをちゅうちょしたが、煙が上がっているの見過ごせなかった。現場では車両周辺が燃えていた。「要救助者はいない。すぐ退避」。津波から逃げるため、すぐに全員が車で現場を離れたが、八戸港湾合同庁舎の近くで急に津波が押し寄せてきた。



八戸市防災マップを見ながら市津波防災センターの位置を指さす細越さん（東奥日報社）

セダン型の指令車は流され、前方に停止した補給車と道路脇の土手にぶつかって止まった。幸い指令車の窓は手動式で、細越さんは窓を開けて車外に身を乗り出し、土手の上にいた消防団員の手を借りて脱出。指令車に同乗していた隊員2人と他の消防車両3台の隊員は車両の上によじ登り、津波が引くのを待った。「怖いという気持ちはなかった。隊員たちに何かあったら取り返しのつかないことになる、と考えていた」。隊員は全員無事だったが、細越さんにとって苦い記憶として残っている。

震災後間もなく、細越さんの元に仲間の消防職員の男性が南三陸町で、津波の犠牲になったと連絡が入った。細越さんと男性は2000年ごろ、東京・消防大学校で6カ月間、研さんに励んだ仲だった。

男性は非番ながら、避難者誘導のため高台の自宅から勤務先の消防署に向か

う途中、津波にのまれたという。「非番でも責任を感じて勤務先へ向かったと思う。自分も同じ立場ならそうしていた。もし八戸に同じ規模の津波が来ていたら自分もどうなっていたか」。同町は最大 20 メートル超の津波が襲ったとされ、津波の規模が細越さんと男性の生死を分けた形となった。

細越さんは、今から半世紀以上前に発生した十勝沖地震での経験も忘れられない。学校からの帰宅途中、高台から白銀の砂浜に津波が押し寄せるのが見え「津波が来るのにまだ砂浜に何人がいて、『逃げろ』と叫んだのを覚えている」と振り返る。

八戸消防本部消防長を最後に定年退職した 17 年、細越さんは完成したばかりの市津波防災センター館長に就いた。「変な話、津波に縁がある」と話す。同センターは津波避難ビルとして整備され、[南海トラフ地震](#)対策を進めている県外自治体からの視察もある。しかし「津波避難ビルはあくまでも緊急避難施設。基本はここ（津波避難センター）ではなく高い所へ避難してほしい。想定を上回る津波が来ることもあるのだから」。南三陸の仲間のような悲劇を生まないために、声を大にして訴える。